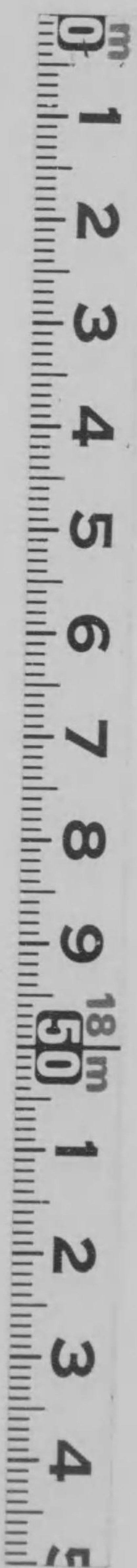


國際國民之親鸞

389

19

始



國 際 民 國

と

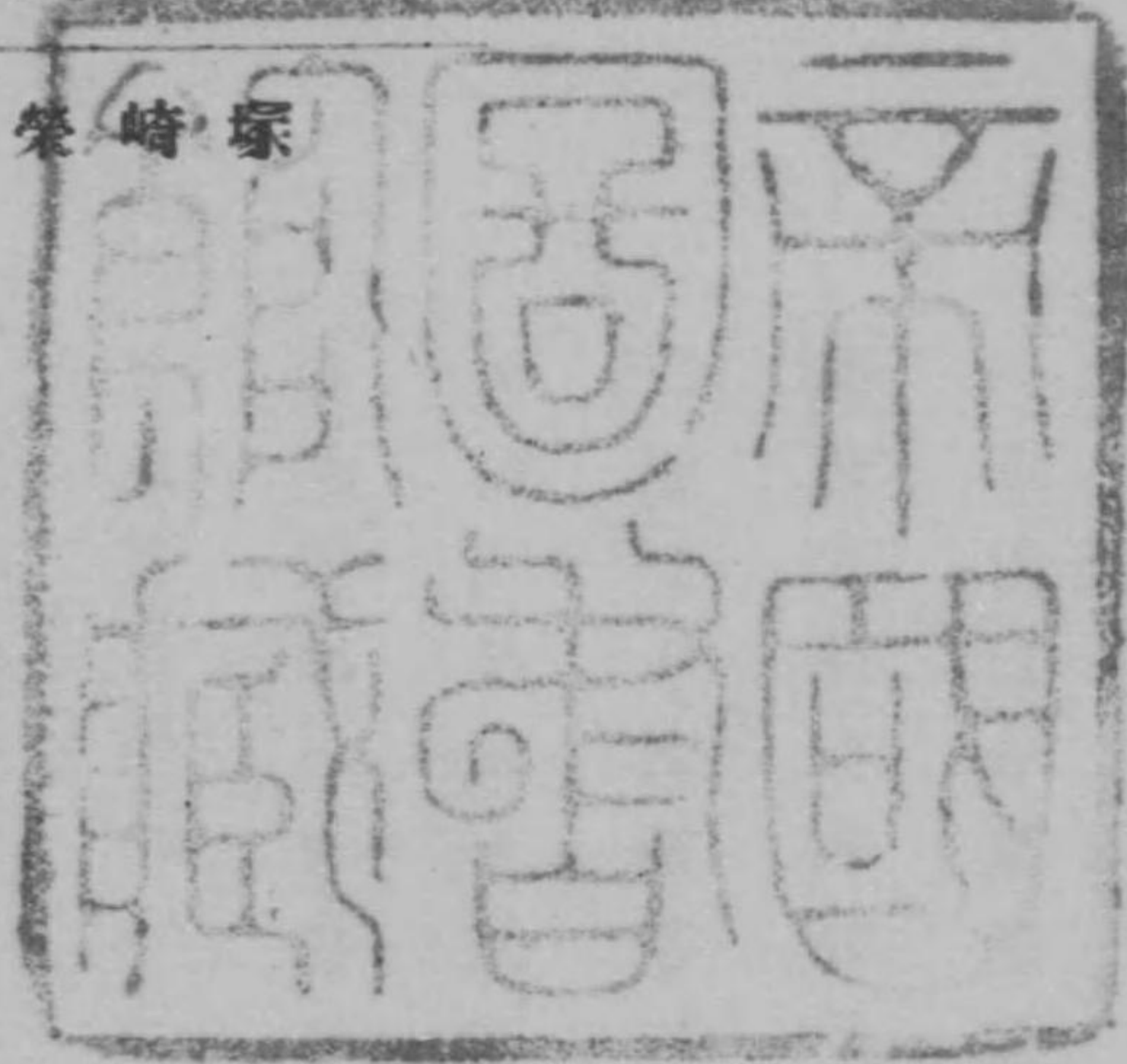
親 鸞

國民宣傳叢書第二編

389-19

鸞親と民國際國

著 智 榮 崎 塚



大正
9. 1. 14
内交



序

一、本書は、今夏能登七尾大谷派教務所主催の特設巡廻
 講習の際、地方都邑の指導的地位にある僧俗の方の前
 に致せし講演速記に、添削を加へたものである
 教務所長村上忍師の切なる御希望によつて、講演
 多少差扣へた點を補ひ、主として當時聽講の方へ配布
 される目的の下に、公にすることになつた。

一、始の該講習は、寺院僧侶の方を主賓とするやうな
 話であつたから、前半に於て現國民生活と宗教との間

大正
 9. 1. 14
 内交

題を述べ、後半に於て三帖和讃を概論して、親鸞聖人の
信の現代的意味を汲んで見たいと思ふてゐたが、夫も
一地方三回已下の講演であつた爲、全般に亘ることが
出来なかつたばかりでなく、甚しく粗雑の講述に終つ
たことを恐縮に耐えないのである。

一、最後にこの小冊子出版の機縁を造り下さつた村上
忍師、速記の勞を賜はつた瀧山師の好意を感謝する。

大正八年十二月

著者

國際國民と親鸞

目次

一 國際國民の自覺	一
二 時局問題と宗教	八
三 宗教的生命と國語	一六
四 民族の興亡と宗教的生命	二八
五 親鸞聖人の信の體系的概観	四〇
六 體系的具現者としての二人格	五六
七 體系的概観の歸趣(一)	六二
八 體系的概観の歸趣(二)	七八

國際國民と親鸞

塚崎榮智述

一 國際國民の自覺



私共は「名もなき民」に過ぎないのであります。勿論
 茲にお集りの方には、やれ何々名譽職である、やれ何長であ
 る、やれ先生である、御院主であると、相當に嚴めしひ名を持
 つて御出での方が多いのであります。夫に致しましても
 若し悠久たる人類の歴史、廣大なる地上の生活、さう云ふ大

國際國民の自覺

世界の上から見ましたならば、我々が何年の間か與わられた名譽の名前、何年の間か國家人生の上に盡した努力と云ふものは、實に電光石火の果敢なきものに過ぎないのであります。やがて此の世を終つて十年、三十年、五十年、乃至百年の末に、世間は我々が此の地上に棲息してゐたことすらも忘れて了ふのでありませう。かくて私共は實に『名もなき民草』に過ぎないことを痛感するのであります。けれども翻つて考へるに、此の『名もなき民草』も、其名もなき儘に、世界の現勢から見ると、其まゝ國際的生活を営みつゝある國民であります。即ち國際的國民であります。

す。よく歴史家は『世界は池の如きものである』と申しますが、世界に起る出來事、大は國家上の事項から小は私共の一投手一投足に至るまでが、此の池の中に投石するやうなものであります。池の中に石を投じますと、その石の大小投じた力の大小によつて、多少の緩漫遲速はありまして、も必ず其處に起つた波紋は岸のはてまで何程かの影響を及ぼすものであります。手近かな例は今回の世界戰亂の事實であります。其全體の原因としては、勿論バルカン半島に於けるスラブ民族とゼルマン民族との權力争ひがことをこゝにいたらしめたのでありませうが、其の直接の導

火線とも云ふべき原因は、彼のスラブ系の塞國の一高等學校の生徒ガブリロ・プリンツエプなる一少年が當時ボスニア地方の大演習統監中であつた獨逸系の奥國皇太子並に妃殿下をサラエヴォ市に狙撃したことであることは御承知の通りであります。一九一四年六月二十八日、殿下等がサラエヴォ市の歡迎會に臨席の歸途、突發した此の一件が爾後一ヶ月餘にして全歐洲を修羅の巷と化し、滿五ヶ年古今未曾有の戰禍を醸し、休戰後尙一年遠く處を異にせる我が日本までも未だに益々其動亂の波動を受けしめられつゝあることを誰れかその皇太子の凶事の起つた時豫期

したでありませう。狙撃すると云ふことは、僅かにピストルの引金に指を當てる丈けのことで茲にお出の誰れがピストルを打てない者がありませう。而も塞國の一少年によつて放されたピストルの爆裂の結果は、世界を擧げて直接の戰死傷者三千三百萬、戰費三千五百億と云ふに至つて驚くの外はないのであります。此外休戰前後にかけて起つた露獨等の革命の滲禍、世界中が物價暴騰、食糧不足、思想破壊等の動搖の苦しみを嘗めつゝある事實を見る時、我等は彼の一少年の投石の波紋の及ぶ處、餘りに高く餘りに激しひのに驚くのであります。此事實を見る時、實に人生と

云ふものが不可測の動亂を極めつゝあると共に、亦一個人の一投手一投足の影響する處の偉大なことに驚嘆するのであります。彼の塞國の一少年も、彼がピストルを放つまでは我等と同様に實に『名もなき』塞國の一民草にすぎませんでした。併し乍ら一度、箸を持つ丈けの力も要せない引金を引いた時、彼は早く國際世界の動亂を巻き起した不出世の人であります。

是れは最も手近な有名な一例でありますがかう云ふ例は隨所に求むることが出来るのであります。アメリカのお百姓の綿の不作は、直ちに日本の我々の着てゐる衣服の値

を高めるのであります。造船所の職工諸君の一人々々が怠業に出ると、軍艦の製造に響き日本の國防上の問題となるのであります。能登や九州の一馬骨にも等き私共が納税を怠ると、直ちに國力の問題に關するのであります。之れは男子ばかりぢやありません。御婦人にも重大なことであります。御婦人が立派な子女の教育をなさるかなさらぬかで、國政上隨つて國家の力の高下となるのであります。臺所の用を果されるにしましても、一粒の米を大切にされること、一サジの砂糖を注意されること、それが即ち今國民の惱みつゝある食糧問題解決の秘鍵であります。さ

れば現代、少くとも世界の現勢に目をつくるならば、我々は一面「名もなき民」であると同時に、其儘國際國民として國家國民の休戚に連る力を有する民であります。國家や國民の問題などは、顯官要職の當路の人に任してよいと思つたのは、早く昔の夢でありました。

我等は國民全體がよつて、國民の前途を憶念せねばならぬ時が来たことを痛感します。茲に我等が生を此土に受けた使命があると信するのであります。

二 時局問題と宗教

鐵火の戦は既に業に終りました。併しベルサイユに於ける媾和會議上の思想戦、經濟戦、人道の假面を被る巧妙の戦は、決して會議の終局と共に終るものでありません。日本は今や外には此の國際折衝の戦に努力すると共に、内には在來の徳川時代の遺物思想や又打ちよする流行思想に批判の戦を開いて新日本文明の創造に努めねばならなくなり、ました。舊世界の惡思想に對する破壊の苦痛、流行新裝の泡沫思想に對する批判創造の陣痛、其のあらゆる苦惱を背めて生き行かねばならないのであります。

實際に現日本ほど思想上動搖が激しく波打つて來た事

もないのであります。内には徳川幕府遺物の事大主義官僚思想や町民心理の遊蕩趣味が沈澱してゐる處に、外からは急激に戦争の波動に送られて、國際聯盟デモクレーシヤ、マルクス社會主義、労働問題と襲來したのでありますから、目まぐるしくも一時に沸騰したのが現日本の思想界であります。夫故に驚いたのは當局者であり、經濟家であり、學者であり思想家であり、資本家であり労働者でありました。其驚きが具體的となつたものゝ内で最も大きなものが、床次内相の三教主腦者招待、五ヶ條の訓令、引いて民力涵養思想統一の運動となつて表はれたのであります。今私は夫

等に對する一々の批評は準備も欠て居りますし、暇もありませんから、癢めて置きますが、唯一言概括的に批評を下すならば、現代の其等の多くの施設計營に一として、確固たる宗教的信念の伴はない欠點を指摘して置度と思ふのであります。而て此宗教的信念なき計營は決して徹底して遂行されないものであるとを附加へたいのであります。況や今日の國家の問題は決して物質上の問題でなく、心の問題、我等から見れば宗教的信念の問題であります。今日喧ましひ労働銀問題なども全く食へないと云より、思ふ通りに費澤がやれないから起つて居ると見た方が適當であります。

或は資本家の貪慾放縱と云ふ心の病から起つて居ると見た方が適切であります。されば政策や訓令の問題と云ふより寧ろ民心の問題即ち宗教的信念の問題であります。夫故に今日國民の民力涵養問題などにしても、此の宗教的信念を外にしては、殆んど無意味に近いのであります。既に我日本に置きましては、一千三百年前歴史上始めて輸入された外來思想を統一攝取して、國本の大義をお立て遊ばした聖徳太子は常に『世間虚假唯佛是真』と道破し操返されました。此御言葉の意を傳へて我が親鸞聖人は『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そ

らごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますところ』仰せられたのであります。共に宗教的信念なき事業は、虚偽虚飾の空中樓閣的施設に過ぎないことを、深い御經驗から道破されたものであります。

私は今それらのことを一々述べて居られませぬから茲に宗教によつて國民の一人々々が救はれ随つて全國民が救はれた事實を提供してお話を進めて参りませう。

夫は今回の戦争の尤も重要な立役者の位置を占めた獨逸の興亡の跡を辿る時、直ちに氣付くお話であります。話

しは今一九一九年から百十三年を逆上つて一八〇七年末から八年の初頭にかけて起りました。當時獨逸の首都柏林は佛蘭西に起つて四隣を席卷し其勢至らざるなきナポレオン皇帝の爲めに前年の秋冬の頃から蹂躪せられて皇帝の軍下に戒嚴せられてゐる時であつて、ドイツ帝國は全く曠廢して國民は塗炭の苦を嘗めてゐたのであります。この亡び行く獨逸の爲めに猛然として立つた一學者は深く獨逸國民性の研究を極め其焔ゆるが如き愛國心よりして遂に一八〇七年の末より八年の初頭にかけて、あらゆる獨逸の學者教育家の前に白熱の獅子吼を試みたのであり

ます。それは申すまでもなく大教育學者であり大哲學者であり、又柏林大學初期の總長であつた處のフイセテでありまして、その大講演は當時の佛軍哨兵下にあつて、度々彼の軍隊の大鼓の響に妨げられたと云ふ柏林大學の講堂に於て『獨逸國民に告ぐ』の題下に試みられたのであります。

私は今茲に其講演の全體を祖述する暇がないから私のこの講演に必要な點に就て少し計り述べて見たいと思ふのであります。

三 宗教的生命と國語

彼によれば獨逸の國家的廢退は全く「人が利己心を此上もなく増長せしめた爲めに自己と自己の獨立を失つて遂に自滅の境に墜ち」たと云ひ斯くの如き國家の廢頹から「再び蹶起するには、一の新なる世界を開いて、その國自身の時代を作り、此新世界を發達せしめ、此新時代の内容を充實せしむるより外に途」はないと云ひ、此國民を道德的廢頹に導いた誤まれる自由意志的舊教育を捨て、新世界創造の爲めには嚴密なる必然による國民的意志の鍛練を経

て祖國愛に煽ゆる現實的の國民を作るにありと様々切言して居るのであります。彼は「眞の宗教心——單に此地上に於て享くる短い生涯だけ人間社會の一員となつて果つるのみでなく更に高尚なる一種の社會的秩序に従ふ所の一種の心靈的生活に屬し、その永遠の連鎖の一片を形造る——を養生することが新教育最後の事業である」と云ひ、其の宗教的生命は國語によつて國民の間に確保され、支持されるからして眞の宗教心は祖國愛に生くるのであると云ふやうに説いて、新教育を提唱して居るのであります。かゝる教育主張が如何なる意義を現代に有するか、さう云

ふ批評は茲に致しません。が少くとも現日本の教育界に於ては充分の敬意を拂ふて顧慮すべきものであらうと思ひます。

夫は夫れとして私の興味を惹く、フイヒテの研究は次の點であります。彼は此の主張を無法に獨逸人に強いるものでなく、其處に深い研究と注意とを拂つて、かくの如き教育事業は獨逸人にとつてふさはしきものであるか否かを考察したのであります。即ち獨逸人は本來如何なる素質を有する國民であつて、又此獨逸人の素質は上に略述する彼の主張の如き教育を受くる能力と、感受性とが、他の歐洲

國民に優つて居るか否か、若し優つて居るとすれば新教育によつて復興することが出来ることと證明して國民を激勵したのであります。そして其獨逸國民の特質を明かにする爲めに彼は獨逸人と他のセルマン民族と比較對照して『獨逸人と他のセルマン民族との運命の間に存する區別の中、最初にまづ直接に』區別せらるゝものは、住所と

國語とであるとし、別けて重要な問題は、この國語の變化であるとして居ります。國語の變化と云ふことは、彼の限定して云へる處では、『獨逸人は本來の國語を維持し、他のセルマン人は外國語を採用したといふ事實』並に『其の

國語が間斷なくその國民に依つて常用されてゐるか否か』を問ふのであります。此國語問題に就ては、東洋殊に佛教の影響の下にある人々にとつては、随分忽緒に附せられてあるやうであるから少しく、フイヒテの意見に私の考を加へて話して見たいと思ふのであります。彼によれば、言語は決して隨意になされた勝手な決議や約束によつて生るゝものでなく、反つて初めに心の内に心理的の原則があつて如何なる概念も、この原則によりて人間の發音器官たる口にあらはれて、必ず或る一定の音となり、他の音となり得ないといふのであります。例へば非常に驚ろいた時、急激

に發した音を、俗に『黄色い聲』と云ひますが、此の驚ろいた時發する聲は、銘々勝手に發するのでなく、一定の人間の心理の法則があつて、急激に驚く時には皆同一に『黄色い音』を立て、他の『白い』とか『赤い』とかの音は出ないのであります。夫故元來は人間が言語を話すのでなく、人間の本質心理の原則が之れを話すのであるから、同じ本質を有する人間にそれが通するのであります。されば言語は、誰れ夫れの言葉と云ふものがあるでなく、唯一つの例へば花と云へば、甲の人の花があつたり乙の人の花があつたりするでなく、唯一つの、且つ絶對的なものがある丈けで

あります。勿論絶對的と云つた處で、其處に時間の變遷、風土氣候、交通の變化等による發達變化のあることは勿論であります。昔の言葉がすたれて新し言葉にかはり外國輸入の言葉が同化されて新熟語を創造するなどは此例であります。

此の外的影響、風土や人情や氣候や交通等が同一のものである場合、換言すれば『同一の外的影響の下に立つて共同生活をなし、絶えず思想を交換しつゝ、己れの言語を發達せしむる人々の全體を、一の民族と呼ぶならば、この民族の言語は』隨意に今日のやうになつて來たのでなく『必然

的に（必ず今日つかつてゐるやうな言葉となるべき理由があつて）現存の如き形になつたのであつて、實はこの民族が自己の認識（見たこと、信じたこと）を話すのではなくして、此の民族の（心理的本質とも云ふべき）認識自身が、この民族の口を籍りて自己を發表するのであると云はなければならぬ』のであります。換言すれば民族の共同生活によつて傳へ承けつがれる意志、感情、智識と云ふやうな謂は、生命が心の内から口をかつて語り出すのが言葉となつたのであつて、此點で生命即言語と云へるのであります。同時に言葉が生命であります。佛教では、言語は一の生命

指示の方便とする點から、随分言葉を重んじない思想があります。勿論生命のない言葉も澤山ありますが、それでもやはり非生命的言葉として、言葉即生命と云へるのであります。此點で各民族の生命の強弱、彈力、脆弱等は、其言語の性質を研究、また直観することによつて知らるゝのであります。即ち其國民の言葉が彼等の内心から湧き出る、謂はゞ丹田から出る明白な言葉であるならば、其國民は強い生命を持つた民族であると同時に、又明瞭な頭腦を持つた人民と云へませう。又曖昧な言葉や、輕薄な借り言葉などを用ふる

民族なら、一度にその輕薄々弱な國民性を見ることが出来ないのであります。個人の上でも、神經質の者の早口、鈍重の者の遅口、素朴な人の數少ない言葉頭のよい人の明瞭な言語と、一々其人の特質を表はしたものであります。其の一々の人の上に言葉は、其人の生命を指示して居ります。茲に生命の問題、即ち宗教の樞機も言葉にあると云へるのであります。我等はこの點で、日本語と云ふものゝ上に、顧みねばならぬ。世界に於る日本民族の精神的特質は、此の言葉の上に現はされて居るのであります。祖先の宗教的偉人の著述の上に、國語的彈力を味ふことが我等の重要な使命

と感ずるのであります。但し、此問題に就ては今少し述べたいのであります。が長くなるから他日の機会を待ちませう。さてかくの如き見解から、フイヒテは獨逸民族と他のゼルマン民族とを區別して、『その要點は、獨逸人は最後まで自然力より流れ出づる活々とした國語を話し、他のゼルマン民族は只表面のみ運動を示し、その根底に於ては、死したる言語を話し、といふことに存する』と云つて、此の相違の結果は次の様な民族的消長を來すと云つて四ヶ條の相違を擧げて説明し、最後の第四條にその四ヶ條を總括して活々とした言語を以て居る國民にあつては、一般人民が優良で

あり、且つ創造的である。かくの如き國民の形成者は、自己の發見したるものを先づ一般人民に對して試み、そして彼等に影響を與わやうとする。之に反し、死語を話す國民にあつては、教育は一般人民と分離して居り、一般人民を自己の計畫の盲目的なる道具以上に見てゐない』と云ひ、第一の民族は精神的發達を遂げ、第二の民族は墮落すると云つて居る。而も彼は詩作を奨めて、『個々の生命の中に始まつた思惟を、一般的生命の中に導き入れる——個人を生命を——一民族の共通生命の上に確かむる意であらう——手段として最も卓越せるものは詩作である』と云つてることなど

を考へますと、吾が宗祖親鸞聖人が自己の内に湧いた信念を國語によつて表白せる『教行信證』已下の述作に示さる、讚仰的詩作の態度を、今更のやうに仰ぎ見るのであります。我等はかう云ふ見地からして今一度日本宗教を顧みなほして見る必要もありませんが茲に一々話しておれませぬ。

四 民族の興亡と宗教的生命

扱、フイヒテの尙一つの獨逸人の特質に關する證明は、此の國語と民族的的精神發達のこととに關連した具體的事實、

即ち『歴史に現はれた獨逸人の特性』であります。彼は如上の(獨逸人は活々した言語を用ひた創造的の特性を持つて居ると云ふ)『推論通りの現象が實際に現はれてゐることを指摘する』處の證明材料として『先づ第一に獨逸國民の最後の偉大なる或る意味に於ては、全く完成されたる世界的事業即ち彼の宗教改革を取つて説明し』てゐるのであります。

宗教改革とは申すまでもなく、一五一七年獨逸の一山村の農夫の兒より出たルウテルによつて、その警鐘を撞かれた獨逸の宗教改革であります。當時の歐洲は、所謂十三四

世紀に始まる文藝復古の餘波高き時代で、學術文藝等の新興の勢は、到底武陵桃源の夢を續けて來た教會の王國に建て籠つた羅馬加特力教會の教義や、教權又腐敗しきつた僧權の下に、其の教徒を繋いで置くことを困難ならしめて來た時代で、敏感な各國の先覺者達の間には、漸く宗教改革の意見が準備されつゝありましたが、併し何れも大きな導火の先鞭を切つた程のものはなかつたやうであります。

偶々一五一三年、法王レオ十世が法燈を繼ぐや、法王は當時歐洲の諸帝をも遙かに凌ぐ程の經常費を以てして、而も生活費、交際費、土木費等の不足を告げたので、遂に贖罪券と

云ふ、此券を買ふことによつて罪惡を贖はれ、天國に往くと云ふやうな券を賣出したのであります。勿論其の前中世時代の教會にも、之れに似たやうな一種の行爲はあつたのであるが、かう露骨に出たのは、今度が始めて、而もそれが當時ルウテルのゐたウキッテンベルヒ市などで盛んに隨喜され販賣されると云ふに至つては、驚くの外はないのであります。此有様を見たルウテルは憤慨に耐へません。彼は遂に起つて同年十一月一日、ウ市の祭日にその城付きの教會の門扉に、九十五ヶ條の贖罪券に對する反對意見を述べた文書を發表して、反抗的態度を示し、改革の第一烽火

を擧げたのであります。勿論法王廳も沸騰し、國民も動搖しました。が有力な諸侯の庇護心ある人士の呼應によつて遠からず改革事業を遂行して了つたのであります。今日新教又はプロテスタントと云ふ基督教の一派は、此のルウテルの改革派であります。

フイヒテは此宗教改革を目して、かくの如き偉大な事業を敢行しおふせた處の獨逸人は必ず自己の新教育の理想に適し、民族的精神を充實し復興し得ると云ふのであります。

實際宗教改革などいへば、何でもないことこのやうに見ね

ますが、其實彼が云へる如く、『獨逸國民最後の偉大なる事業』であつて一朝にして遂行されるものでありません。唯單に精神的方面をぬきにして考へても一の固定した社會や國家に力をおく宗派に、反抗したり又は分離して一新宗派を唱導するとは實に生活上の危険又は生命の危害を考へねばならぬのであります。我日本の宗教改革とも云ふべき法然聖人の淨土門の創立に當つても、南都北嶺の敎權からの壓迫は遂に承元の法難となつて、法然聖人親鸞聖人等の流罪死罪、夫れ丈でも實に常人のやれる事業でないのである上に、眞にそれよりも重大なことは、改革者自身の

内に信念の火が燃ゆるあがらねば遂行されぬのであります。夫故フイヒテも、ルウテルの宗教改革に就て『宗教改革に際し、多くの人は、(ルウテル)已外その前後にウイクリフとか又改革説の爲めに禁刑にあつたフスだとか、ヅウインクリ、とかカルピンの徒であらう』現世的目的を抱いてゐたかも知れない。而してこの事業が成功したのは、唯永遠の力に、よつて感激したる一人の指導者があつて、彼等を導いたのに依るのである』と云つて居ります。フイヒテは是をもつて『獨逸人の嚴肅なる性質及び獨逸人の情緒の一の立派な證明』として新教育を叫び、獨逸人を激勵したのであります。

フイヒテの此講演はもつと色々な問題も附加されてゐるが私は彼の新教育の理想が極めて嚴肅崇高の宗教的信念にあると云ふことを注意すればよいのであります。

全獨逸の指導者とも云ふべき人々に向つて試みられた、此國士の熱血の講演が、どれだけ彼等を激勵し、宗教的に導いたかは、想像するに難くありません。其後の獨逸の新興の力は、或は爲政治家の指導のよろしき點もあつたでせうが、私は伯林大學總長として(此時まで其地位はなかつたが)の此教育家の大聲疾呼が、全國民に及ぼした反響を以て其

有力な一大原因と信ずるのであります。果然獨逸は此一八〇〇年代戦後煽然として興つて來ました。學術に武力に實にすばらしい勃興を來したのであります。私はこの原動力を、彼等の祖先にルウテルを有することを慢る如く、彼等も又永遠の力を信ずる熱烈な宗教徒であつたと云ふことに歸せざるを得ないのであります。

然らば、其後一八七〇年代新興の力を以て佛國を破つて鬱勃の國力を示した獨逸は、何故現戦争に負たかと申しますと、色々説も立ちませうが、私共の見る處は全く獨逸近來の思想界殊に哲學界が論理主義旺盛の時代で、其餘波に

禍されたと信せられるのであります。論理主義とは、理知の力を過大に信ずる一の打算主義であつて、此れが獨逸軍事當局の頭までも支配して、戦前敵味方の兵力國力等充分打算をしてゐたのであつたが、四圍の事實は常に彼等の打算を裏切つて不可測に動いたから遂に收拾出來なくなつて負たのであると信じます。論理的打算思想をきた人生へ當てはめて當ておふせなかつたのであります。此論理主義打算思想は、惻怛な物質思想（精神界の）であつて非宗教的思想であります。少くとも我等親鸞聖人の信を眞の宗教と信ずるものからは非宗教的物質思想としか思

へないのであります。人生常に動亂やみなく流動をついける人生を、理知で區劃をつけて計算するなどは全く物質的打算思想であつて眞の生命に感激する宗教でありませぬ。夫故私は、獨逸の破れたのは非宗教的思想に禍されたと信するのであります。

以上申して來た事で、フイヒテの宗教に就ては委しくは述べなかつたから充分でないが大體に於て宗教的永遠の生命を信する信念から活動する國民は興隆し、非宗教的の單なる現世思想が擴がれば國は危いと云ふこと隨つて個人個人も生きながら眞實には死んで了ふと云ふのが了解を

乞へたと思ひます。宗教と申した處で色々の宗教もありますが、今は單に今日の國內國外に於けるあらゆる問題も眞の宗教によらねば解決出来ないものであると云ふこと今日一切の問題は精神的の問題であること云つたこと、考へ合はして頂けばよいのであります。つまり宗教とは人生に對する一つの信知であつて、此信念さへ確立されるれば從屬的な物質生活上の諸問題を匡正制御されるのであり又實人生の實行方面に對しては敢爲の勇氣を與ふるものであるから之れなくては國民の民力興亡に關する問題解決も出来ないし、そればかりでなく信念なくて人生に動

くと云ふことは、其人にとつても社會に對しても罪惡であります。自己にさへ信じていゝか否かわからぬことを社會に施設すると云ふことは最も大きな罪惡であります。

五 親鸞聖人の信の體系的概観

前回私は現在の國內國外の諸問題は宗教的信仰によらねば解決も確立も出来ないことを、獨逸の興亡の跡をつけてお話ししたのでありますが、それならば宗教信念とはどんなものか、宗教と云つた處で、基督だの佛敎だの、又其中にも色々の宗派があつて一概に云へませぬが、今私はさう云ふ

比較宗教學見たやうなことは諸君の御研究や、又其道の人に譲つて私の今信じて居る、我が親鸞聖人の信仰はどんなものであつたかを直截に述べて見たいと思ひます。

親鸞聖人の信仰と申しても、もう夫は七百年已前の方であつて、今日聖人の信仰を味ふには、どうしても其時代の思想界並に聖人の著書の全般を問題とせねば味はれないのであるが、さう云ふ事も此小講話のよくすることでありませぬから、今は聖人の御著述の中で尤も一般の人に親しむ三帖和讃を概観して聖人の信の内容を伺ひ、其現代的歸趣を闡明して見たいと思ひます。

三帖和讃とは申す迄もなく浄土和讃高僧和讃正像末和讃でありまして、共に聖人が和語を以て佛恩師恩を讃仰されたものであります。處で三帖和讃と申しますと三帖一具のものとしてされてゐますが聖人の御製作の動機並に年時から申しますと初め浄土和讃高僧和讃の二帖が寶治二年御年七十六歳で御草稿が成立して、其後正像末和讃御述作の意志はあらせられなかつたのであります。丁度八十五歳の御年即ち康元二年二月九日の夜に夢告を感得遊ばして

彌陀の本願信すべし

本願信するひとはみな

攝取不捨の利益にて

無上覺をばさるるなり

の讃が自ら出来上がりしました緣由から、その後約四年、八十八歳の正元二年頃までに完成されたものが正像末和讃であります。で前二帖と正像末和讃とは一應わけて觀察する要があるのであります。

そこで先づ始めの二帖を讃仰の形式上から窺ひますと、夫れはごうしても佛法僧三寶の順序になつて居るのであります。佛とは我等が救はれる救濟の原理即ち法の自覺者體現者であつて、謂はゞ其法の人格化された救主であります。法とは其の自覺者の具體的人格を抽き去つた眞理、

即ち救ひの原理を名けたもので、僧とは、實人生の民衆生活の上に佛の理想的人格（云は、佛法の二つが一致満足した）を體現して行く人であります。淨高二帖の和讃の内容は、初めに救済主阿彌陀佛を讃仰せる讃彌陀偈和讃、次が法としての阿彌陀佛の救の法則を讃嘆された三經和讃、已下の諸章があつて、高僧和讃は其名の如く僧寶讃嘆であります。最も佛と申せば一般に、具體的の釋尊と云ふのであります。親鸞聖人は救済主としての佛は、思想上の佛でありまして、具體的の印度に戸籍を有された釋尊ではありません。即ち、報身の阿彌陀佛であつて、應身の釋尊ではない

のであります。法も勿論此阿彌陀佛の救ひの原理でありますから、其法藏菩薩の衆生救済の御苦勞の物語を表す本願成就の名號と云ふ事も全く思想上の事實であつて、共に具體的の實人生、其物ではないのであります。此思想上の佛思想上の事實を、實人生の日常の言行の上に體現して行く者が僧であります。今日僧と云へば、全くその佛法の實現者ばかりであるとは云へぬが、僧本來の意義は、此佛法を多數民衆生活の上に實現して行く人であります。ですから佛法の眞理は常に之等實現者によつて眞の人生の生命として活躍され、生かされるので、此點から申せば佛法は常

に眞の實現者を待ちつゝあるのであります。

此の佛と法即ち淨土和讃では佛と申せば十劫と云ふ永劫の昔衆生救済の願を成就された阿彌陀如來法と申せば其阿彌陀如來が衆生を救済の願を起された顛末及び其衆生救済の始終が法であつて之の二つは常に一佛の御心中に満足されて常に僧なる體現者を待たれて居るのであると見られたが淨土和讃の一部を貫通する聖人の御考へかと伺はれるのであります。而して此佛法の體現者が地上に現れると云ふ豫感に満ちた和讃が淨土和讃の最後の勢至和讃であります。

元來勢至菩薩は大經下卷觀經華座觀などで見ますと觀世音菩薩と共に阿彌陀佛の左右の協士として觀世音菩薩が佛の大慈悲を代表すると同時に此勢至菩薩は佛の大智慧の表象とも申すべき方であります。換言すれば阿彌陀佛とは大經には如來智慧海と云ひ觀經には佛心者大慈悲是と申されて此大智慧大慈悲の圓滿圓融せる人格者であつて此心の外に佛はましまさぬのであつて其智慧の人格化が勢至であります。

扱て此勢至和讃の勢至はごう云ふやうに讃仰されて居られるかと申すと親鸞聖人は首楞嚴經によつて八首に作

られたが、其意は勢至菩薩が釋迦牟尼佛に對して
 恒河沙劫と云ふ、往昔佛無量光が御出ましになつて、それ
 から一切に一佛宛前佛の跡を繼いで十二劫の時に超日
 月光が御出ましになつた。其超日月光（阿彌陀佛の別
 名）から私は念佛三昧（稱名念佛）を授けられたので
 ある。元來十方の諸佛如來は衆生を一子の如く憐念さ
 れるのであるから、若し衆生あつて、子の母をおもふ如く、
 念佛三昧を行すれば、やがては必ず御親如來を拜見する
 ことが出来る。われはもと、往昔因位の時、念佛三昧によ
 つて無生無滅の證が開けた。夫故に

いまこの娑婆界にして 念佛のひとを攝取して

淨土に歸せしむるなり

この勢至の物語を述べて、次に聖人自らの心を述べて、

大勢至菩薩の 大恩ふかく報すべし

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

と結んで居られる。

此れ、思想的人格の勢至自らをして、念佛三昧を以て、『今
 この娑婆界にして念佛のひとを攝取す』と指呼せしめ、『
 源空聖人御本地也』と、我が鎌倉時代出現の御自身の善知

識法然聖人を呼應せしめて、勢至の化現と讃仰し給ふのであります。此意趣を概括すれば、彌陀の智慧の人格的代表者勢至は、往昔其本地の彌陀如來より念佛三昧の教を授かつて、法然聖人の上に實現されたこと云ふことでもあります。此赴きをもつと明確にされたものが、正像末和讃の

無碍光佛のみことには

未來の有情を利せんこと

大勢至菩薩に

智慧の念佛さづけしむ

濁世の有情をあはれみて

勢至念佛すゝめしむ

信心のひこを攝取して

淨土に歸入せしめけり

の二首であります。

親鸞聖人二十九歳の時、吉水の禪房に

於て「智慧の念佛をさづけ」「信心のひと」として「淨土に歸入せしめ」た師匠法然聖人は、單なる僧でなく、溯源すれば、勢至菩薩であり、阿彌陀佛である。阿彌陀佛の慈悲を傳ふる智慧の勢至菩薩であります。此勢至の化身法然聖人の思想上の傳統を辿れば、天竺支那、我朝の三國の七高僧となり、更に釋迦牟尼如來に達するのであります。

釋尊とは親鸞聖人によれば、久遠實成の阿彌陀佛（久遠の古より成佛せる十劫已前の本佛）が、衆生救済の爲に十劫の昔淨土を建設して、其處に影現して衆生を待ちてましますことを、五濁の凡愚に説き示さん爲に、印度迦耶城に應

現したまへる善知識の佛であります。夫故釋迦世に出で給ふ所以は阿彌陀佛如來の本願を説く爲めである。随つて釋迦出世の本意を祖述する七祖も念佛即ち名號の功德を讚説することに、其職分は盡きて居る。と見るのが親鸞聖人が七祖選定あそばした理由で、又高僧和讚の御讚述の意義であります。寔に阿彌陀佛の救済の原理なる法大智慧と大慈悲とは、時處を異にして、其體現人善知識によつて適時適所に指開されるのであります。

衆生化度のためにとて、この土にたび／＼きたらしむであります。其最後の智慧の念佛の傳持者、體現者善知識

が聖人にあつては直接の師匠法然聖人でありませう。夫故七高僧和讚の最後の法然聖人の讚には、

智慧光のちからより 本師源空あらはれて
 淨土眞宗ひらきつゝ 選擇本願のべたまふ
 と云ひ、又

本師源空の本地をば 世俗のひと／＼あひつたへ
 綽和尚と稱せしめ あるひは善導としめしけり
 源空勢至と示現し あるひは彌陀と顯現す
 と讚仰せられたのである。彌陀勢至、釋迦及龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七祖は源空即ち法然聖人に代表せし

められるのであります。

以上が淨高二帖に於ける、佛法、僧の形式によられた和讃の全斑である。

然るに吾等は、高僧和讃の末後、一首の廻向和讃の前に七高僧の名前を列ね給ふ一列を見る時、此に見逃す可からざる一事は、其七祖列名の次に、肩を並べ

聖德太子

敏達天皇元年
正月一日延生

當、佛滅後一千五百二十一年也

とある二行であります。今まで一句の讃嘆なき聖德太子が、突然茲に並列され給ひしことである。何故に聖人は大

子の名を列ね給ひしか、夫は幸に正像末和讃の中に出る『皇太子聖德奉讚』に示されてある。即ち、

救世觀音大菩薩 聖德皇を示現して

多々の如くすてずして 阿摩のごとくにそひたまふ

大慈救世聖德皇 父のごとくおはします

大悲救世觀世音 母のごとくおはします

の意につきて居ります。つまりは佛の慈悲の代表者觀世音として日本文化の創業者聖德太子を禮拜讃仰されたのであります。即ち先の法然聖人を、智慧の代表者たる勢至の化身と拜せられしに對し、今聖德太子を慈悲の代表者た

る觀音の化身善知識として直接日本の史上に彌陀の大智慧、大慈悲の前に禮拜されたのであります。西方十萬億土の遠きにましますと申される阿彌陀佛に、同じ日本の言葉の生命によつて會ひまつられたのであります。

六 體系的具現者としての二人格

申すまでもなく法然聖人は淨土教創立者として鎌倉當代佛教界獨歩の宗教家であつて、學徳並び高く上下擧つて勢至の化身と仰いだのであります。況や二十年の自力の苦行かなはずして遂に聖人によつて信の眼を開かれた吾

が親鸞聖人にあつては眞に生ける彌陀如來として、又勢至菩薩として仰がれたのであります。其れと同時に、此念佛の教を我が日本に取り入れて、眞に日本民族の眼を開く文化事業を創始遊ばした聖徳太子は、實に日本文化の母であり觀世音の化身とも仰がるのであります。單に其御一生の御事業を見た丈でも觀世音菩薩の化現であること信せしめらる御人格であつたから、歴史上にも早く上代より觀音の御化身と申し上げて居るのであります。況や此度此教によつて救濟を信じ給ふ吾が聖人にとつては、『和國の有情をあはれみて、如來の悲願を弘宣したまふ』觀音の化

身と仰がれたのであります。其處に親鸞聖人は直に

三朝淨土の大師等 哀愍攝受したまひて

眞實信心すゝめしめ 定聚の位にいらしめよ

この内心の要求を満され給ふたのであります。

彌陀觀音大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかみつゝ 有情をよばふてのせ給ふ

その衆生求哀の大願業力の全き活動に眼をさまされ給ふたのであります。

私共は常に佛菩薩を西方十萬億土の彼岸に遙拜せんとする傾きを以て居るのであります。金泊まばゆき宮殿の

奥に敬遠し去らうとするのであります。併しながら無倦の大慈と申される佛の慈悲、現在西方に説法まします如來の智慧の用きは決して彼岸の彼方に安處閑居ましますのではありません。大無量壽經の淨土の莊嚴を説く一節には、西方の彌陀如來は、數千萬億の化佛となつて、十方の世界を照し、衆生濟度の行を積み給ふとあるのであります。淨土の菩薩はまた、目まぐるしく一念一刹那のすき間もなく、十方の國々に遊化して諸佛を供養しては法を頂戴し、又衆生濟度の大行を成就せられるのであります。考へて見る丈けでも壯觀ではありませんか。

嘗て大哲カントは「わが上なる星の輝く空」を彼の思想の核心的名題である道徳律とを並て「考へれば考へるほど新たな感激と崇敬とが増して行く」と云ひましたが、我等も亦此の人間の歴史と云ふ大空に輝く古聖賢別しては三朝浄土の大師又聖徳皇の如き大きな人生を導く明星と、その明星の教旨に味識随順せしめる信念とを想ふとき、同一の喜びと崇敬を深められるのであります。

親鸞聖人は此の歴史の大空に輝き渡る無数の浄土の菩薩、其上首である勢至觀音の御化導を我建國已來の歴史上に眼のあたり拜見して、其教化を信受遊ばしたのであります。

す。三朝浄土の大師等の哀愍攝受到に眼を醒まされ給ふ時、眞實信心を得、定聚不退の信心海に入らせ給ふたのであります。

大師聖人すなはち勢至の化身太子又觀音の垂迹なり。

このゆるぎにわれ二菩薩の引導に順じて如來の本願のひろむるにあり。眞宗これによつて興し念佛これによつて煽なり。(御傳鈔)

この内心に湧起する慶喜に緊張されたことでもあります。

此の活々とした慶喜、現實史上に味識實證された緊張の金剛心、これが今日日本人大多數の精神界を支持する眞宗

體系的具現者として二人格

の源泉であります。基礎であります。吾等は吾等の呼吸しつゝある此の聖人の御信念の思想内容を跡づけて、現代の動亂きはみなき實人生の上に再び味ひかへして見ねばなりません。

七百年已前に聖人の實證あそばした信の意味を、吾等の感ずるこの國際的にも國內的にも動亂不可測の實人生の上に翻譯して見ねばならぬのであります。

七 體系的概觀の歸趣 (一)

親鸞聖人が三國の七祖を選定して法然聖人に代表せし

め、その聖人を以て勢至の化身と奉侍まし、た御心はな
んであるか。勢至とは申すまでもなく阿彌陀佛の智慧の
代表であります。最も佛智は單なる智でなく大慈悲と混
融不可分のものであつて、適當に申せば、悲智圓滿の御心の
智の一面を表に立て、佛智と申すのであります。既に智
慧と申せば、一切の眞理を求むる精神科學、自然科學の眞の
智と申してよいのであります。それが佛の大悲にそむく
やうな智慧は決して佛智ではありません。之れに反し入
間の眞の幸福を増上する智慧ならば、それは如何なる智識
にせよ佛智と申すべきであります。併し何れにせよ智慧

の用きは人間の迷妄の黒闇を照して、眞理を極むることで、其手段として宇宙の萬般の現象や、事項から具體的の雜多のものを抽き捨て、一の原理を推定することであり、今數學で云へばお錢の一錢二錢、紙の一枚二枚など數ねることから、其具體的の性質錢とか枚とか云はれる特殊のものを抽き去りて、規範として一とか二とか云ふ數を推定するのであります。また人間の生活に於ても、「面白いことを聞いて」「氣持がよい」とか、「温かい陽に當つて」「氣持がよい」など、色々「氣持がよい」場合がありますが、其「面白い話を聞いて」とか、「陽に當つて」とかの特殊の

具體性を引き去つて單に「氣持がよい」と云ふ事、丈けを定めると、夫れは一の原理となるのであります。智慧の用きは其眼ざす處は色々、現象から、かく抽象し單純化して一の原理又は法則を推定する事であり、此の原理によつて萬般の事項をさばいて行く處に、原理の價値があるのであります。

そこで今佛智の表象者である勢至菩薩の使命如何？と申すならば、それは又今申した智慧の能きを示されるのであります。人生の無明の黒闇を照破する所謂佛の救濟の原理を示さるゝ處に、其使命は盡さるのであります。阿彌

陀佛の智の代表者とは阿彌陀佛こそは、一切衆生の生死の迷ひを救ひ給ふ御相であるぞと示される處に、其御使命が存するのであります。印度御出現の釋迦牟尼如來の成佛救ひの自覺龍樹天親曇鸞道綽善導源信源空諸聖の成佛原理、それが南無阿彌陀佛なる佛ぞと示さるゝのであります。釋迦七高祖等の民族的時代的生活上の種々の具體的現象を抽き去つて、歸納された原理、これが御救ひの南無阿彌陀佛の相であるぞと示さるゝ善知識が勢至菩薩であります。其の最後の表現者、指開者として、親鸞聖人の前に現はれたのが、法然聖人でありました。随つてこの和讃に現

はれたまふ法然聖人は、美作の武士漆間時國の子が出家成道した具體的の鎌倉時代の代表的儀僧法然聖人でなくして、救済の思想的原理、南無阿彌陀佛の御こゝろを一身に體現し、且つこれを親鸞聖人、その他の門下に指示し給ふ處の善知識、『世に出で、弘願の一乗ひろめつゝ、日本一州ことごとく淨土の機縁』に導く處の淨土眞宗の開祖としてあります。それゆゑに、思想上の軌範的善知識の化現として、和讃には、『智慧光のちからより本師源空あらはれ』と云ひ、『勢至と示現し』と云ひ、『阿彌陀如來化してこそ』と讃仰されるのであります。既に原理化せられた人格で

ありますから随つて随時に隨所に應化を示されるのであります。換言すれば南無阿彌陀佛なる救ひの原理は、其體現人を待つて何れの時何れの場所にも化現され、印度、日本などの國境も、何時の時代と云ふ歴史上の時代推移も眼中にないのであります。それ故に和讃には、

本師源空の本地をば 世俗のひとくくあひつたへ
綽和尚と稱せしめ あるひは善導としめしけり

と仰せらるゝのであります。南無阿彌陀佛の智慧の光明の前には、印度人も支那人も日本人も、乃至現代であらば、東西各國所謂第十八願の十方衆生諸有衆生皆悉く救はれる

のであります。所謂佛の智慧の光明は、三世十方の衆生の迷妄を晴らさんとする、文化的智慧の光明であります。夫故に淨土眞宗の名號他力の信念には、國境も人種の別も、老若男女も選ばざる無別道故の同朋生活があるばかりであります。

茲に民族の境界區域を徹して温情の握手をかはして、世界の文化に貢献せんとする四海同胞の理想的世界が名號の中に指示されてあるのであります。夫故に我等が今實際的國民として名號六字を信受することは、廣く智識を世界に求めて人文史上に、四海同胞の理想を實現せんとする

教に隨順せんとすることでありませぬ。此點から云へば南無阿彌陀佛の主智的一面は、ウキルソンの國際聯盟の主張を道破されたものと見てよからうと思はれるのであります。所謂四海御同行御同朋主義であります。

併し乍ら我等は我等の日常の具體的生活の要求や現前の生活を凝視する時、徹頭徹尾、此主智的一面の教令に順應することの困難を痛感させられるのであります。其處に激發流動する情意の盡きざる要求、刺戟を感ずるのであります。之れは具體的民族的、生活からの要求であります。單なる感情生活は顧みないとしても、深い内心の情意的要

求、同感や同情によつて、賑はしき樂さを求めて生き行く民衆生活に於ては——夫れが私共の現實生活であるが——又實生活の上に生命を實證し味識せんとする現實生活に於ては、どうしても同民族の間に自然に發生し、相承相續される國語につながる親密感を外にして、四海同胞など云ふことは間接的の生活理想に過ぎないのであります。やはりフイヒテの云へる如く、我等の生命の要求を、現實に確保し、實證し味ふことは、同一國語の上に呼吸し行く國民的生活に支持されねばなりません。私共に生命の永久化、深刻化、擴大化と云ふやうな要求がなければそれまでいあるが、是ある

が人間の使命であるといふ見地からは、どうしても國民と云ふ大地の上に之を確保せねばならぬのであります。茲に止みがたき國民としての具體的生活の要求があります。妻子を帶しての愛欲の生活に没頭する個人的要求の生活、其れが同習慣同言語同一文化の親密を感せしむる要求であつて見れば、同一國語の下に統らるゝ國民的生活の要求は、止みがたき人生の要求であります。茲に四海同胞の理想主義的立場よりも、國民的民衆生活を直接立場とするところの、現實其儘救はれたい欲求が私供にとつて自然であり眞實あるのであります。前の世界同胞的立場を、現世界

の現實に對して假に國際的立場と申すならば、今説いて來た國民生活的要求から見た立場を國民的立場と申せませう。換言すれば、三世十方を貫通して世界全民族に平等に光被して救ひ給ふ彌陀如來の救ひを、印度人支那人日本人等の區別國境を徹廢せぬその儘日本人は、日本天皇の下に統られつゝ國民的現實生活のその儘救濟を仰ぎたいのであります。現實生活を絶対に尊重して行くその儘救濟を仰ぐ、藝術的要求であります。寔に人その人にとつて、其人の現實より尊いものはないのであります。我等の現實は假令夫れが愛憎違順の劇苦の五濁の生活であつても、それ

が人性の自然であつて見れば、どうすることも出来ない愛着であります。吾等にとつては、此具體的的人生が唯一の又絶對のものであります。此具體的國民的生活の、その儘に救はれたいこの要求が、現實的國民的立場であつて、やむを得ない愚痴な、罪惡な要求でありませう。

幸ひに、彌陀の救済の本願には、十方衆生と世界全民衆に喚びかけ給ふ御言葉の次に直に『至心信樂欲生』の語があるのであります。至心信樂欲生とは純一無雜の眞心を以て、佛に歸命すると云ふことであります。『そのまゝ、信する』と云ふことであります。各國民は國民的生活を改む

ることなく、愛欲の生活そのまゝ、信せよとの言葉に隨ふ心であります。

憶うて茲に至れば親鸞聖人が、至心信樂、そのまゝ、信せよとの教令に隨順して、五欲の現實生活をやむを得ずも肯定し、國民的生活に順はれた立場から、先に掲げた『聖徳皇太子和讃』の御意を辿る時、其處に釋然として、其御心持ちを了解し奉ることが出来るのであります。聖人は太子を讃して

和國の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しがたし

一心歸命したてまつり

奉讃不退ならしめよ

又、

上宮皇子方便し

和國の有情をあはれみて

如來の悲願を弘宣せり

慶喜奉讚せしむべし

と仰せられたのであります。

如來の大悲の代表者觀世音菩薩の化現上宮皇子が、『和國の有情をあはれみて、如來の悲願の弘宣』し給へることには、申すまでもなく、國民的在家五欲の現實生活、其儘の救済を垂れ給はんが爲めであります。夫故に太子は又、『和國の教主』にましますのであります。太子は佛法を民族的立場の上に實現された袈裟をかけ給はぬ僧であります。

止を得ざる現實肯定の善知識であります。

是に反し、勢至の化身法然上人は、三世十方通貫の念佛思想開導の善知識として、日本一州に念佛宗をひろめ給ふのであつて、その機縁茲にあらはれつゝあると見るならば、此の思想的信念を忘れて、鬪諍堅固の末法生活に沈淪しつゝあつた當代の國民は、『片州濁世のともがら』であります。四海同胞の立場からはその國土は、『粟散片州』粟をちらせる如く、世界の片隅に介在する邊土にすぎないのであります。

源空上人によつて眞諦門思想的立場の安立を得られ、太

子によつて俗諦門情意的立場を得られ、而も其處に何の矛盾を感じることなく、其信念を確立され、又佛法と云ふ如き思想的事實を、其體現人たる僧としての二大士の上に直接善知識を仰がれ、信を現實に實證された處に、近代思想界に於ける親鸞聖人の地位を仰ぐのであります。

八 體系的概観歸趣 (三)

以上聖人の引導者としての佛法並に七高僧別しては源空上人並に聖德太子に關する和讃の思想を觀察して參りましたが、今一度之れを概括すれば、

思想的内生活の救済主としての彌陀は、その指開者勢至に代表せしめられ、印度支那日本を通じて七祖となりて親鸞聖人を引導し、

具體的現實生活の救済主としての彌陀は、其の指示者觀音の大悲を具現して聖德太子と示して、親鸞聖人をして佛智不思議の誓願にすゝめ入らしめたことと云ふことであります。

思想的内生活、具體的實生活と云つた處で、それが二つの異つた生活でなく互に表裏交通相應して生き行く生活の二面にすぎないのであります。前者は所謂眞諦門的生活

で、後者は俗諦的生活であります。親鸞聖人は此の二面の生活を即ち主智的理想的生活の一面と、主情意的現實的生活の一面とを融合未分の其儘全分救済され給ふたのであります。

茲に對象としては、此觀勢二菩薩の悲智を全ふせる彌陀佛を、現實史上に信知されたのが聖人の信であります。二大士の重願を享けて一佛名阿彌陀佛の本願を信せられたのであります。

親鸞聖人の此の信の事實を、吾等は今如何に信受すべきであるか。國際的にも國內的にも、動亂極まりなき劇苦の現實に呼吸せる我等は聖人の信仰によつて如何に導かれつゝあるか、これ次に述べべき問題であります。聖人は既に七百年以前に、上の二菩薩の引導に順じて淨土眞宗の信に歸せられたのであります。而も宗教の信の極致を示されたものと信する親鸞教徒吾等は聖人の七百年以前の信仰を現代に再認し、其御こゝろをそのまま翻譯することによつて、此暴風驟雨の實人生に不動の立脚地を築き得ると信するのであります。既に上來の話して其邊のことも御了解になつたと思ひますが、今少し説明の勞を取つて見たいと思ひます。

先づ聖人が阿彌陀佛の主智的表象たる勢至菩薩を軌範的善知識とし、其應化として三國の七祖を選定あらせられた御意を釋するに、三國とは今日の全世界と云ふことでもあります。鎌倉時代の日本人にとつては、印度支那日本が直ちに全世界各國でありました。此の世界に軌範的善知識を求め給ひしことは即ち廣く『知識を世界に求め』(五ヶ條御誓文) ることでもあります。即ち今日我等を指開する如き善知識、基督でも孔子でも、カントでもヴントでもロダンでも皆悉く之れを知識とすることでもあります。最もそれは軌範的善知識として求むるのであるから、當然其の具體

的生活たるユダヤの基督、獨逸のカントなどから、ユダヤ的生活を導く指導原理謂は、ユダヤ魂、又獨逸的生活生命と云ふやうな獨逸魂とも云ふべきものは、之れを捨象抽きすつべきであります。もつと適切に云ふなら、その國その國の魂は味識研究しても、自己の民族的生命を無くして模倣崇拜する要はない、文化的材料として、之れを廣く世界に求めよとの意を信受されるのであります。

一言に概括するならば、主智的には『廣く世界に知識を求め』この明治維新創業の御精神を汲みまつることでもあります。此の點から云ふならば、眞實の智識であるならば、

一切の科學の上にも、また廣く何れの國にも求めよと云ふのであるから、此點では所謂十方衆生式四海同胞主義とも云へませう。思想的には世界主義であります。

併しながら主情意的觀音の化身を和國の有情をあはれみ給ふ太子に求め、和國の教主と仰ぎ給ひしことを考へ申すならば、具體的實際生活に於ては情意を和國の教令即ち國家の傳統的精神に歸命せよと云ふことであります。傳説的精神子孫國民の將來に情意を繋ぐ生活に順せよと云ふことであります。國民を統ます天皇陛下を頂いて「大に皇紀を振起すべし」との勅命に隨ひまつることであり

ます。其處に「久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり」と、無條件の大悲を垂れ給ふ大慈救世聖德皇の指勸に、隨順して、民族進展の天命を頂戴する時、順逆淨染の具體的

生活そのまゝ、救ひを信知するのであります。かく聖人の信の内容を拜察する時、一向友の、「智識は世界に情意は日本へ」の言葉を憶ひ出さずに居れないのであります。聖人の信の思想的半面は世界的であり、夫れを統一しての信仰的生活は全く祖國民衆生活への隨順でありました。ご信ずのるであります。換言すれば思想上世

界同胞主義であり、實生活上の祖國民衆主義者とも見れば、見れるのであります。勿論聖人御自身主義など仰せられたのでなく、聖人の信の體系を跡づけ、此國際的動亂の現代に照して分析すれば、かうも云へるかと思ふのであります。蓮如上人が常に信心は内心に蓄へ、王法は額にあてよと仰せられたことは、單に『御消息集』の『朝家の御ため國民のために、念佛まふしあはせたまひさふらはい、めでたくさふらふべし』の一文一句を相承されたことゝも、思はれないのであります。其處に國民生活としての、それは愚であり惡であつてもやむを得ない要求を御自身に直觀され

しと、又親鸞聖人の信念の全體の基調を體得されたと考へられぬこともないのであります。

されば聖人の教徒の現代的指標もまた『王法爲本信心爲本』であらねばならぬのであります。

此私の始めに云つた國際的國民たる現代人を指導すべき、又現代人の信を指示する唯一の信仰は、實に上來述べ來つた親鸞聖人の信仰であり、現代の諸問題を解決する立脚地も亦茲にあると思ふのであります。所謂民力涵養、勞働等の國內問題も、又國際聯盟、マルクス思想流行等の國際問題も、此見地で解決せねば徹底しないと思ふのであります。

が、今一々の問題に就ての話は、あまりに廣汎に亘る恐れが
ありますから今回はやめておきます。

唯最後に一言して置きたいのは、前述の世界主義的の一
面と祖國民衆主義的の一面とは、どうして矛盾なく御一人
の信仰の内容となり得たか、と云ふ事でありませう。世界同
胞主義と云へば直に國境を超へて國家を無くして世界全
民族共同の生活を享樂すると云ふやうに考へられ易く、ま
たかく考へつゝある者も随分多いやうであります。又國
家だとか祖國だとか云へば、各國民は各自の國境を嚴重に
防備し各がじゝ自國の利害問題にはかり没頭して外國人

と見れば外敵あしらひでもするかの様に考へられぬこと
もない様であります。此の二個の互に矛盾する様に見え
る思想生活が親鸞聖人御一人の生活の上に、どうして實現
されつゝあつたかと、疑問の起らぬこともないかと考へら
るゝのであります。今此の問題に就て少し付け加へてお
き度いと思ふのであります。

併し此問題をお話するには順序として深く現代人に根
をおろして居る個人主義から述べて行くが適當でありま
す。

實際今日の多くの人が考へ行ひつゝある如く私共にと

つて私自身より可愛く私自身より尊いものはないのであります。古往今來の人情の物語は皆實際に此ことを示しつゝあります。適切に云へば私の而も今日現在より可愛いものはないのであります。此にどうしても個人現實主義にならざるを得ぬのであります。併し一步進んで其個人とは何ぞやと反問する時我等は一言に之を答へることは出来ません。自然科学者のやうにこの肉體の一々の細胞が祖先傳來の賜物であり、又社會學者のやうに我々の精神の要表を分析して、言語、風俗、習慣、制度、法律、宗教、文學等を同じうする社會の賜物であること云ふやうに説明しなくて

も直に内視して『我れ』は『我れ已外』の廣大な世界と關係交渉せる一個人に過ぎないとの見地が得らるゝ筈であります。日本人たる我等は日本語に支配されて精神的生活を辿れる日本民族の一員一細胞に過ぎたいことは、誰しも否まれない事實であります。されば一個人は又國家的生存の一個人であつて、此自己愛は茲に眼がつけば『祖國愛』とならざるを得ぬのであります。されば個人主義の立場自己愛の立場から云つても尤も自己を完全に生かし完全な満足を得んとすれば、どうしても個人主義は祖國主義に代らねばならぬのであります。換言すれば祖國を愛

することが眞の自己を愛することでありませう。尤も個人
 の人格擴大の要求など云ふ思想から云へば、尙一層大なる
 者を要求して或は釋迦の如く基督の如く直に世界同胞主
 義即ち人類を打して一團とした人類的社会團結の上に自
 己を見出す要求もありませう。世界平和の地上天國を實
 現しやうとの要求もありませう。併しそれは不可測の未
 來彌勒出世の時代を期すべきことで或は實現されやうし、
 或は實現されぬ夢想であるかも知れませぬ。さういふ未
 來のことを夢想するより我等は我等の今日の生活を問題
 の立脚地とすべきであります。共にはさうした期しが

たき平和の世界よりも此世界動亂の逆巻く現在の日本民
 族自己の今日一日が急要の問題であります。

かく觀しますと我等否私の生活を支持する最も大きな
 統一體は、『祖國日本』の國家民衆とより外に考へられぬ
 のであります。此意味に於て現前の私にとつて世界とは
 直に日本と云ふことであります。

實際個人の場合でも其人々々の個人の特色を認め其人
 の適能を適所に働かして共同するのが眞の共同であつて、
 各特色ある人々を劃一して働かしめるのが佛教に云ふ惡
 平等であり眞の公平な共同生活でないやうに世界主義と

云ふやうなことも眞の意味を徹底せしむれば、各國家が國家を無くして握手すること云ふことでなく、各國家は各其基礎を強固にし、各自の才能を練磨し、各の特色ある文化を發揮し、世界の文明に貢献するのが眞の世界共同の四海同胞主義であつて、此意味で云へば、我等の世界とは直に日本と云ふのは、決して今日丈に限られた意味ではないのであります。茲に祖國民衆の生活に隨順して、民族的要求に隨ふ國家主義は決して世界主義と矛盾することなく、現實生活上に實現せられるのであります。

かく觀來つて、我等は眞に今日の動搖極まりなき國際國

内の諸問題に遭遇した日本人の内心の立脚地が、親鸞の信の大地に下さるべきであることを痛感するのであります。已上甚だ蕪雜であつたが私の今申上んとする概要骨組み丈は一通り終わりましたから、之れで今回の講演を終わさして貰ひます。(完)

國際國民と親鸞 畢

大正八年十二月廿八日 印刷
大正九年一月十日 發行

定價金貳拾錢

郵稅貳

著者 塚崎榮智

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十八番町二十二番

發行兼印刷者 西村七兵衛

不許複製

發行所

京都市東六條口
電話下四五八番
大阪一七〇四番

法藏館



389
19

終

